

2026年9月9日

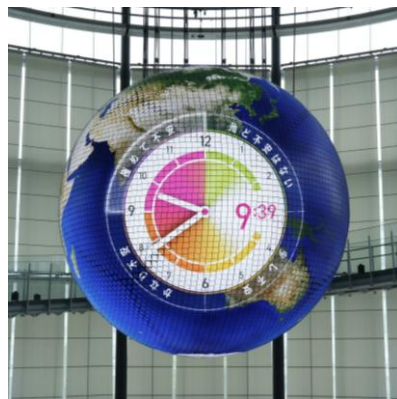
公益財団法人 旭硝子財団

公益財団法人旭硝子財団「環境危機時計®」調査第35回記念 時刻発表会 2026を開催 2026年の時刻は「9時39分」に

日本科学未来館の直径6m球体ディスプレイ『ジオ・コスモス』で時刻発表

科学者・宇宙飛行士の毛利衛氏、気候科学者の江守正多氏、登山家・タレントの野口絵子氏が登壇
それぞれの「私の環境危機時計」発表を通じ、環境危機意識と持続可能な未来への希望を語る

公益財団法人旭硝子財団（理事長：島村琢哉）は、2026年9月8日（火）、日本科学未来館にて、「公益財団法人旭硝子財団『環境危機時計®』調査第35回記念 時刻発表会2026」を開催いたしました。本発表会では、世界中の有識者の環境危機意識を集計した「環境危機時計®」の2026年時刻「9時39分」を発表したほか、日本の一般生活者を対象とした「第7回 生活者の環境危機意識調査」の結果も同時発表しました。会場では、日本科学未来館のシンボルである直径6mの高精細球体ディスプレイ『ジオ・コスモス』に時刻を映し出すアンペール演出が行われたほか、科学者・宇宙飛行士の毛利衛氏による基調講演、気候科学者の江守正多氏と登山家・タレントの野口絵子氏による特別対談を実施。登壇者の危機意識を調査し、独自の時刻を算出した「私の環境危機時計」の発表を通じて、環境意識の現在地を社会全体で正しく共有するとともに、持続可能な未来に向けた行動を呼びかけました。



『ジオ・コスモス』を活用して発表された
2026年の「環境危機時計®」

■2026年の「環境危機時計®」時刻は「9時39分」。

時計の示す背景を共有し、未来への対話と行動のきっかけに

発表会の冒頭では、当財団 専務理事の杉本直樹が登壇し、本年の「環境危機時計®」および「第7回 生活者の環境危機意識調査」の結果を発表しました。2026年の世界平均時刻は前年から6分進み、「9時39分（極めて不安）」となり、気候変動や生物多様性の喪失といった課題が相互に深く結びつく現状が示されました。一方で「生活者の環境危機意識調査」では、環境問題の解決可能性について大人世代の「解決できる」が27%にとどまる中、学校でSDGs等を学んできた高校生世代は過半数の51%が「解決できる」と回答。未来を変えようとする若い世代のポジティブな姿勢が提示されました。杉本専務理事は「この時計は単に不安を知らせるためのものではない」と説明。針が示す数字を知るだけでなく、その背景にある一人ひとりの意識や危機感を世界中で共有し「私たちがこれから何ができるのかを共に考え、対話を起こすきっかけにしたい」と、持続可能な地球環境の実現に向けた、対話と行動の重要性を訴えました。



【本件に関するお問い合わせ先】

旭硝子財団「環境危機時計®」35周年記念 記者発表会 PR事務局（ひとしずく株式会社 内）担当：みつほし・かねこ

TEL：090-4435-1884（みつほし）/ 080-3404-4164（かねこ）MAIL：agf@hitoshizuku.co.jp

■毛利衛氏による基調講演

宇宙からの視点と、「地球生命として生き伸びる」ための行動の重要性を語る

続く基調講演では、宇宙飛行士・日本科学未来館 名誉館長の毛利衛氏が登壇しました。毛利氏は『ジオ・コスモス』を用いて宇宙から見たリアルな地球の姿を映し出し、地球環境の尊さと危機の深刻さを伝えるとともに、環境危機時計を「地球の状態を知る手段」であると語りました。講演後には、有識者と同じアンケートへの事前回答によって算出された、ご自身の「私の環境危機時計」の時刻「11時34分」を発表。非常に高い危機感を示す結果に対し、急速な人口増加や人類史の視点を交えて解説しました。そのうえで、「地球生命として生き伸びる」というメッセージを提示。宇宙から見つめた地球の回復力に触れ、地球の修復はまだ間に合うことを強調するとともに、科学技術等のあらゆる知恵を結集し「決して諦めず、地球生命として持続的に生き残ろう」と未来への行動を力強く呼びかけました。



■江守正多氏 × 野口絵子氏による特別対談

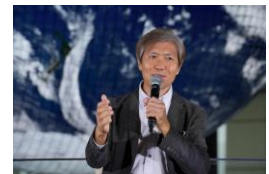
理想の速度ではなくとも対策は進んでいる。危機感と解決策をセットに、前向きな行動と発信へ

毛利氏の基調講演を受け、未来に向けた対話として、気候科学者の江守正多氏と、登山家・タレントの野口絵子氏による特別対談が行われました。

まず、環境危機時計®の2026年時刻「9時39分」について、野口氏が「起きてしまった危機をどう止めるかの問いかけ」と受け止めを語ると、江守氏は専門家と社会の認識のギャップを指摘。一方、高校生世代の過半数が「環境問題は解決できる」と答えた調査結果には、野口氏が「未来を変えようとする子どもたちのアクションの表れ」と分析し、江守氏も「若者の前向きな姿勢は大人世代の希望であり、『諦めている場合ではない』と背中を押される」と応じました。

また、環境危機を社会に発信する“伝え方”について、現場での体感を大切にする野口氏に対し、江守氏は「危機感と同時に『解決できる』』という説明をセットにすることが重要。理想の速度ではなくとも対策は進んでいる」と前向きな事実を伝える意義を強調しました。

また「私の環境危機時計」では、回答結果が偶然にもお二人揃って「8時54分」となり、会場からは驚きの声が上がりました。野口氏は、食育活動の経験から「自然の元に戻る力を信じ、まだ遅くない」と訴えると、江守氏も「若者たちの前向きな意識に刺激を受け、これから社会全体で行動を起こしていく期待を込めた時刻だ」と意図を説明。最後に、暮らしと自然の結びつきへの意識や、SNSでの情報収集など、今日からできる身近な一歩を呼びかけました。



■島村琢哉理事長によるご挨拶

未来を悲観するためではなく、「行動を起こすための時計」に

発表会の最後には、当財団 理事長の島村琢哉氏が登壇し、イベントを総括しました。島村理事長は、「環境危機時計は未来を悲観するためのものではなく、私たちが今どこにいるのかを知り、これから何ができるのかを考えるための時計でありたい。本日の機会が、それぞれの立場から地球環境について考え、行動を起こすきっかけとなればうれしい」と語り、今後も環境危機時計をはじめとする様々な取り組みを通じて、地球環境との向き合い方を社会に問いかけ、対話と行動を共に促していく姿勢を示しました。その後、登壇者全員が『ジオ・コスモス』を背景に質疑応答・フォトセッションを行い、盛況のうちに発表会は幕を閉じました。



■開催概要「公益財団法人旭硝子財団『環境危機時計®』調査第35回記念 時刻発表会 2026」

開催日時：2026年9月8日（火）15:00～16:15ごろ

会場：日本科学未来館（東京都江東区青海2-3-6）

主催：公益財団法人 旭硝子財団

登壇者：毛利 衛氏（科学者・宇宙飛行士 / 日本科学未来館名誉館長）・江守 正多氏（気候科学者 / 東京大学未来ビジョン研究センター教授）・野口 絵子氏（登山家・タレント）・島村 琢哉（公益財団法人旭硝子財団 理事長）

・杉本 直樹（公益財団法人旭硝子財団 専務理事） 司会進行：櫻田 彩子氏（エコアナウンサー）